

「無知の知」の現代的再考

——リスクの知識社会学的アプローチ——

東北大学 正村俊之

1 目的

災害に関する近年の社会学的研究は、社会の内部に被害の原因を探り出そうとしている。「リスク」と「危険」を区別するリスク論や社会のバルネラビリティに言及する災害研究は、いずれも被害を生み出す社会の仕組みに注目している。東日本大震災に関しても、その社会的原因に目を向けなければならない。東日本大震災の被害は、津波被害と原発事故被害に大別されるが、どちらにおいても、リスクは、被災前の災害対策と被災後の復興という二つの局面に内在している。本報告では、「無知の知」(ソクラテス)を現代的に再構成することによって、東日本大震災が提起したリスク問題に対して知識社会学的な視点からアプローチする。

2 考察

知の対極に立つ無知は、単に「知らない」だけでなく、「知らないということを知らない」という意味での無知である。これを「絶対的な無知」と呼ぶならば、無知にはもう一つのタイプがある。それは、ある事柄を認識することによって別の事柄が認識されないために生ずる無知、すなわち知の産出とともに発生し、知の内容と相関的な関係をもつ「相対的無知」である。例えば、外部との対立を煽ることによって内部の対立を隠蔽する政治的戦略は、相対的無知を利用している。ルーマンは、二つのものを区別する際、二つのものを同時に観察することはできないこと、もし二つのものを同時に観察しようとするならば、第三項との区別が必要になるが、その場合にも第三項が観察の対象から外れることを指摘した。観察対象から外れた対象は相対的無知に相当する。

相対的無知には、①未来に関する無知、②事物に関する無知、③他者に関する無知という三つの次元(「時間的・事物的・社会的な次元」)が存在するが、いずれであれ、無知に対する自覚をつうじて「知らないということを知る」ことができる。このような相対的無知に対する反省的な知が「広義の無知の知」である。「未知」もそこに含まれるが、未知は一般に「認知的な知」として現れる。相対的無知に対する反省的な知は、価値や実践を支える「非認知的な知」として成立する場合もある。これを「狭義の無知の知」とよぼう。近代科学は自らの守備範囲を認知的次元に限定し、「未知から既知への転換→新たな未知の誕生→未知から既知への転換→…」という循環的なループのもとで発展してきたが、非認知的次元においても同様な循環が起こりうる。つまり、広義の無知の知は、未知であれ、狭義の無知の知であれ、知の産出とともに新たな相対的無知を生み出すのである。

知と絶対的無知の間には、このように複数の「知と無知の混合形態」があるが、知と無知のどこに境界線が引かれ、どのような相対的無知が生まれるかは、社会の内部で規定される。社会がさまざまな区別をとおして自らを組織化する際、区別には「区分・分離・分割・分化」といった派生的形態がある。これらの区別に基づいて知が産出される過程で相対的無知が不可避免的に生まれる。

3 結論

東日本大震災に関するリスク問題は、津波被害か原発事故被害か、被害の発生過程か被災地の復興過程かという二つの軸を交差させた四つの問題群に分けられるが、いずれのリスクも現代社会に内在する構造的な区別、さらには災害対策過程と災害復興過程のなかで設定された構造的・非構造的な区別に起因する相対的無知に胚胎している。無知の知によってリスクを消去することはできないが、被災地の復興、今後の災害対策という二つの課題に応えるためには、視野の外に置かれた事柄を無知の知によって内部に取り込む必要がある。相対的無知は時間的・事物的・社会的次元にまたがるために、この問題は、従来の「リスク管理」を超えた「リスクの社会的統治」問題となる。